

聞き取り調査

抑留記

長野県 加藤 友一

大正八（一九一九）年九月十一日、伊那市美篤に生まれた。昭和八（一九三三）年四月、美篤高等小学校卒業。東京にて紡織修業。親子孫共六人で暮らす。昭和十六年、金沢五五輜重隊に召集。満州牡丹江四五三部隊三中隊に転属。

ソ連軍が牡丹江北部に侵攻し、吉林まで後退する。後退途中、部隊の兵舎を焼き払い、橋等爆破した。終戦を知ったのは吉林省敦化で、ソ連軍から伝えられた。現地で武装解除となる。持っていた兵器等は没

収される。ソ連軍の配下になる。敦化から国境まで徒歩で数カ月かかり連行され、国境に着く。「東京ダモイ」とだまされて上下二段の有蓋車に積み込まれ、一カ月ほどかかり、どこを見ても草原で心さびしい思いであった。

シベリア・タイセット五八収容所に連行される。収容所は狭く採光は暗く、共産教育は毎日行なわれた。シラムが全員発生し、衣服は入浴時熱気消毒をする。一幕舎に三〇人ほどで一〇幕舎ぐらいあり、バム鉄道の鉄道建設労働をする。労役は土方作業、ノルマにより行われた。ノルマにより食物が違い、労働が一〇〇%以上になると白パンでバターをほんの少し、一〇〇%以下だと黒パンだった。厳寒期零下三〇度以上になるので、前の日に現場で火をたき、土を溶かして

において能率を上げた。ハラシヨウ労働者として休日
が少し多くあった。作業場やその往復は、監視兵が付き
きりだった。

一日三回、エンバクのお粥とパン三〇〇グラムで
あった。補食に山菜や茸を入れ、量を増し補った。

タイセット収容所からハバロフスクへ、いよいよダ
モイだ。二カ月ほど建設作業、それよりナホトカに着
く。船名は栄豊丸という貨物船で、船内は平穩であつ
た。

昭和二十三年十月十八日、舞鶴に復員する。

帰国後、戦後社会の出遅れがあつて、営林署で森林
作業と行商をやり、昭和三十年に現在の寿司屋の本業
になる。

抑留記

長野県 立沢 三之介

伊那市小沢区に大正四（一九一五）年十一月二十八

日生。伊那町立実業補習学校を昭和七（一九三二）年
三月卒業。自家にて農業を手伝い、母、兄、兄嫁、
姉、私。

昭和十五年より東京に勤めに出る。

昭和十八年九月二十日、臨時召集により千葉戦車二
連隊に応召になる。小銃兵隊、軽機隊、重機隊、大隊
砲隊等である。

昭和二十年八月九日、ソ連軍が穆稜に侵攻、戦闘参
加。八月十日、穆稜後退途中二回、戦闘する、犠牲者
二十人くらい出る。

九月二十三日、鹿道にて武装解除。鹿道で詔勅を知
る。連隊旗を焼却し連隊長服毒自殺、鹿道駅まで担架
で来るがその後不明。

十一月十一日、牡丹江にて解散。各自が食料として
トウモロコシを取り命をつなぐ。腹がすいて苦しかつ
た。途中駅々で給水できたが、脱走者があり（七人く
らい）、二日間給水ができず死ぬ思いであった。駅で
蒙古人が鶏の丸焼きを売りに来た。

十一月十三日、愛河出発。十二月四日、タイセット